

朝鮮民主主義人民共和国

朝鮮戦争終結まではNo.197参照。

- 1) アジアの社会主義国が開放体制に移行する中で、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）では、独自の閉鎖的社會主義体制を維持している。1992年に【1: 】（IAEA）の査察で核開発の疑惑が浮上。1994年にはアメリカ合衆国との対立が激化する中、同94年、抗日救国の英雄金日成（きんにっせい キムイルソン 1912-94）から息子の【2: 】（きんしょうにち キムジョンイル 1942-）への権力継承が行われた。しかし、旧時代の独裁と個人崇拜が温存され、海外から食糧援助を受けながら、核兵器や中距離弾道弾、ICBMの開発など軍事優先の政策を進め、国際的に孤立を深めた。1970年代後半から北朝鮮によって【3: 】が行われたが、2002年9月、小泉純一郎が訪朝して行われた日朝首脳会談で金正日総書記がその存在を認め、5人の帰国が実現した。
- 2) 2002年1月29日の一般教書演説で ジョージ・W・ブッシュ（息子）大統領が、北朝鮮・イラン・イスラム共和国・イラク（バース党政権）の3か国を【4: 】（あくのすうじく、axis of evil）と名指で批判、米朝関係は更に悪化した。北朝鮮は、2003年1月10日に【5: 】（NTP）からの離脱を宣言。これを受けて、2003年8月に北朝鮮の核開発問題への対応を協議するために六カ国協議が開始された。参加国は当事国の北朝鮮とアメリカ・中国・日本・韓国・ロシアである。北朝鮮は2005年、六カ国協議の中止を宣言、その翌年から、2006、2009年、2013年、2016年と【6: 】を実施した。
- 3) 2011年、金正日が死亡し、三男の【7: 】（キムジョンウン）が後継者となったが、旧時代の独裁と個人崇拜が温存されている。ミサイル発射実験は1993年から実施しているが、【7】体制になってからも、2012年、2013年、2014年、2016年、2017年と実験を繰り返し、弾道弾の開発能力を誇示している。これに対して、日本・アメリカ・韓国・国際連合安全保障理事会等は、仮に人工衛星が搭載されている場合でも、発射は事実上の弾道ミサイル発射実験と見なし、国際連合安全保障理事会決議では、弾頭部に人工衛星を搭載したロケットであるか否かにかかわらず、北朝鮮が弾道弾技術を利用した飛翔体の発射を実施しないよう要求している。当初、北朝鮮は発射は純粋な平和目的の宇宙開発であると主張していたが、近年ではミサイルと言明し、2017年には、アメリカ合衆国全土を射程に収めるICBMを保有したと発表している。

ユーゴスラヴィア内戦

6つの共和国から構成される旧ユーゴスラヴィア連邦では、強力な指導者【8: 】の死（1980）、冷戦の終結で民族対立が表面化し、内戦が起きた。1991年6月に【9: 】とスロヴェニア、同年9月にはマケドニアがユーゴスラヴィア連邦からの独立を宣言。このタイミングでソ連が崩壊（1991年12月）した。1992年に【10: 】が独立を宣言すると、【11: 】とモンテネグロ共和国の2カ国だけからなる新ユーゴスラヴィア（正式にはユーゴスラヴィア連邦共和国、1992年4月発足）は軍隊を侵攻させ、スロヴェニア、クロアチア、ボスニア=ヘルツェゴヴィナで内戦（被侵略側から見れば独立戦争）に突入した。その中で最悪のものが、ボスニア=ヘルツェゴヴィナ紛争として扱われる（後掲記事参照）。1995年10月、アメリカの調停で停戦したが、その後もコソヴォなどで紛争が続く。以上に記した経過は以下の説明で前提とし、省略する。

ボスニア=ヘルツェゴヴィナ紛争 1992～1995年

- 1) ユーゴスラヴィア解体の動きの中で、1992年に独立を宣言したボスニア・ヘルツェゴヴィナには、ムスリム人の他にクロアチア人もセルビア人も住んでいた。4月から3年半以上にわたり内戦となった。その経過は後掲。

次の（%）は独立時に約430万人の人口のうちの民族別比率である。

セルビア人（33%）と {クロアチア人（17%）+ムスリム人（44% ボシュニャク人）} 連合 とが対立し、セルビア人勢力が分離を目指したことから、両者は全土で覇権を争って戦闘を繰り返した。最終的に、死者20万、難民・避難民200万が発生した。

- 2) この過程で「【12: 】と称してムスリム人（ボシュニャク人）女性に対するレイプや強制出産 ※1 などが行われ、第二次世界大戦後のヨーロッパで最悪の紛争となった。

※主にセルビア人勢力がムスリム人女性に対して行ったとされる組織的性犯罪は歴史的大犯罪だが《女性読者の皆様が不快感・嫌悪感を覚えるほど酷いもの》なので詳述を回避する。

《紛争の経過》これ以上簡単には書けない。

- 1) 1991年6月、隣接するクロアチアで起きた紛争を契機に、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの独立を求める {クロアチア人勢力・ムスリム人（ボシュニャク人）勢力連合} と、独立に反対するセルビア人勢力との間で武力衝突が生じた。
- 2) ムスリム人勢力が主導権を握るボスニア・ヘルツェゴヴィナ政府は、セルビア人の反発を無視して1992年、独立を宣言、ECの独立承認を受け国際連合に加盟した。独立に不満を抱いていたセルビア人勢力は、大規模な軍事行動を開始し、ボスニア北部を中心に別の国家を樹立した。
- 3) 1992～93年、軍事力に優るセルビア人勢力は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ全土の6割以上を制圧、【13: 】を包囲した。国際社会は、セルビア人勢力への制裁、【13】への人道支援などを行うが、1992年中はそのままの状況。1993年春、クロアチア人勢力とムスリム人勢力との間で仲間割れが深まり、クロアチア人勢力は同年8月にまた別の国家



を樹立し、敵だったセルビア人勢力と同盟したので、ムスリム人勢力は最大の苦境に立たされた。

- 1994年に入ると、アメリカの圧力により {ムスリム人勢力・クロアチア人勢力の同盟} が復活。アメリカは、両勢力の連邦国家の結成を勝手に決め、両勢力に軍事援助を開始した。【14: 】は3度もセルビア人勢力を空爆した。ムスリム人勢力は、攻勢に転じたがセルビア人勢力に反撃された。セルビア人勢力は国際連合保護軍兵士を人質にする手段をとり、兵士を派遣している英仏と空爆続行を求めるアメリカとの間で意見が対立、【14】は対処不能に陥った。カーター元アメリカ大統領による和平交渉で、1995年1月1日から4ヶ月の停戦が実現した。
- 停戦の期限切れと同時に、激しい戦闘が再開。セルビア人勢力対ムスリム人勢力の間では、セルビア人勢力が最後の攻勢に出て、1995年7月には【13】なども激しい攻撃にさらされた。一方、セルビア人勢力対クロアチア人勢力の間では、クロアチア軍と連携したクロアチア人勢力が優勢で、その戦闘は、隣接するクロアチア国内のセルビア人居住区で行われた。NATOは大規模空爆を実施、セルビア人勢力は大打撃を受け、1995年10月13日には停戦が実現して戦闘が終了した。
- 95年11月には、ボスニア・ヘルツェゴヴィナは、ムスリム人とクロアチア人主体のボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦と、セルビア人主体のスルブスカ共和国（セルビア人共和国）という2つの構成体から成る連合国家となった。

Kosovo 紛争

これ以上簡単には書けない。

- 6つの共和国から構成される旧ユーゴスラヴィア時代から、Kosovo は6つの共和国の一つではなく、アルバニア系住民の自治州だった。セルビア大統領【15: 】任1989-1997は、1990年、事実上Kosovo自治州の政治機構を解体した。【16: 】の大量解雇や文化や教育システムの破壊まで行った。【16】の政治勢力で【17: 】の率いるKosovo民主同盟は、Kosovoの自治権剥奪に対して平和的手段で抵抗し、選挙ボイコット、徴兵拒否、納税拒否を呼びかけ、アルバニア語の学校、病院、診療所の併置を要求した。【15】は1997年、ユーゴスラヴィア大統領に就任（～2000）。
- 【17】の平和的抵抗の方針によって、スロヴェニア、クロアチア、ボスニア=ヘルツェゴヴィナで独立戦争があった間もKosovoは平穏に保たれていたが、アルバニア系住民人たちの間に大きな不満が広がっており、Kosovo解放軍の登場は歓迎された。
- 【15】による抑圧が続くにつれ、アルバニア系住民の多くが過激化し、1996年4月22日、セルビア治安部隊の隊員に対する攻撃が同時多発的に発生した。当時のKosovo解放軍は小規模で地元の農民や追放者、失業者らであったが、1997年初期、無秩序状態に陥っていたアルバニア軍の武器庫から大量の武器が持ち込まれ、Kosovo解放軍の装備を大幅に強化した。多くのアルバニア系住民は、Kosovo解放軍を正当な解放闘争者とみていたが、ユーゴスラヴィア政府はテロリストと呼んだ。1998年、アメリカ合衆国の国務省はKosovo解放軍をテロリストに指定した。ところが1999年、クリントン政権は、ビン=ラディンからの援助を受けるKosovo解放軍と「実質的に同盟関係にある」とされた。
- 武力闘争は1997年以降激化した。詳細は省略する。Kosovo解放軍による攻撃とセルビア側の反撃は1998年から1999年にかけての冬の中間つづけられ、1999年1月15日には【18: 】が引き起こされた。これは、真相は別として、ミロシェヴィッチ政権によるアルバニア系住民に対する大量虐殺事件として報道され、これを契機に国際社会は、ミロシェヴィッチらを戦争犯罪者とみなすようになり、大きな転換点となった。NATOは、平和維持のための武力を投入することのみが、問題を解決する唯一の手段であると断じた。パリ郊外【19: 】における交渉は1999年2月6日にはじめられ、複雑な経過は省略するが、不調に終わった。
- NATOによるセルビア空爆は、1999年の3月24日から6月11日まで続き、最大で1千機の航空機が、主にイタリアの基地から作戦に参加し、アドリア海などに展開された。【20: 】（通称「トマホーク」）もまた大規模に用いられ、航空機や戦艦、潜水艦などから発射された。NATOの全ての加盟国が作戦に一定の関与をした。10週間にわたる衝突の中で、NATOの航空機による出撃は38,000回を超えた。ドイツ空軍は、第二次世界大戦後で初めて戦闘に参加した。この間の5月7日、NATOはベオグラードの【21: 】の大使館を空爆し、3人の中国のジャーナリストを殺害した。アメリカ合衆国とNATOは後に誤りを認めて謝罪し、CIAによる地図が古かったことによる誤爆だとした。
- 1999年10月、Kosovo暫定政権が発足。2008年、セルビアからの独立を宣言。アメリカやEUなど50か国以上が独立を承認したが、ロシア連邦は独立を認めていない。
- ミロシェヴィッチは、2000年秋、国民の抗議行動により退陣し、連邦大統領の座をコシュトニツァに譲った。人道に対する罪で起訴され、2001年7月には国連旧ユーゴスラヴィア国際戦犯法廷（オランダ・ハーグ）に身柄を移送されたが、裁判が非常に長引く中、2006年3月11日朝、収監中の独房で死亡しているのが発見された。死因は心臓発作とされている。

ここまで読んだ方はここで止めないでNo.216へ。

《蛇足》著者より読者の皆様へ 東欧社会主義圏・ソ連の崩壊は、私にとってはすでに教壇に立っていた同時代の出来事で、世界史の教員でありながら東欧・ソ連の社会主義体制がこんなに早期に、しかも非常にすみやかに、変革の巨大さに比べれば比較的わずかな流血のみで崩壊するとは全く予想していなかった。ただし、付随して起きた地域紛争は激しく、根本的解決を見ていない。東欧・ソ連の社会が決して認めなかった思想・信条・表現の自由、信仰の自由などの市民的政治的自由は人間にとって本質的で、これを認めないような国家体制は永続できない。ソ連社会に「共産党貴族」とも言うべきノーメンクラトゥーラという特権階級が存在したことからも分かるように、それは既に本質的に社会主義とは言えない社会だったと思われる。また、たとえばモスクワ中心部まで30分通勤圏に住むごく普通の非党員労働者は、贅沢はできないし、食糧を買うには行列が必要とか国営スーパーの店員の態度がものすごく悪いか決して快適とはいえないものの、日本円換算約2千円の「家賃」だけで十分な広さのアパートに家族と住み、電気・水道・下水料金は含まれ（メーターもない）、医療・教育は一切無償、才能ある子どもは国費で英才教育を受けられ（日本では才能ある子に恵まれると「家が1軒建つほどの」教育費が必要になる）、老後の心配もない。ごく普通の庶民にとっては、貯蓄の必要すらない職衣食住医教老の面では安心して暮らせる社会だった。日本を含めて現在の資本主義国家のどこでも実現していない完璧に近いセーフティネットが実在した。しかもIT社会の到来さえ理解しなかった無能な官僚が支配する非能率の国家においてである！日本のような高能率の社会の仕組みを、ほんの少し変えただけで、複数政党制と市民的政治的自由を保障したまま、すばらしい理想社会が作れるのではないかと、そんな妄想を抱かせるに十分な事実である。2009年の正月を「派遣村」で迎えた方々、また近年では「ブラックな」企業で死ぬまで酷使される労働者の姿を見て、私たち「進学校」の教員もかなり「ブラックな」勤務をしているのだが、資本主義社会における自由とは、死ぬまで酷使されたり、簡単に解雇されたりする道をあえて選択せざるをえない「自由」を意味しないはずであると思ったのは私だけではないだろう。

2017年夏記す。